短 報

韓国においても Name Letter Effect は生起するか？^{1, 2}

藤井 勉 誠信女子大学校人文学部

Does the name-letter effect emerge in Korea?

Tsutomu Fujii (College of Humanities, Sungshin Women's University)

The present study examines whether the Name Letter Effect (NLE), one's preference for his/her initials, is observed in Korean people. One hundred and eighty-eight female university students in Korea participated in this study. Using the Name Letter Task (NLT), the NLE was observed in the Korean sample. It suggests that NLT is available in Korea to measure implicit self-esteem. For future directions, the possibility of intervention to improve implicit self-esteem was discussed.

Key words: name letter effect, implicit self-esteem, explicit self-esteem, name letter task

近年、韓国では自殺が増加し、大きな社会問題になっている。藤原（2011）によれば、2000年には6,500人程度であった自殺者数は2003年に1万人を超え、2009年には15,413人に達している。2012年には10万人あたり28.1人が自殺しているという値も報告されており（Statistics Korea, 2012）、これは経済協力開発機構（Organisation for Economic Co-operation and Development: OECD）の中では最も高い値である。

また、自殺は韓国における10代から30代の死因の1位である（藤原, 2011）。韓国の大学生は、高校卒業の直前まで家庭および学校、社会から大学入試中心の過度な関心と期待のもとで生活する。実際に、高校時代に親から受けた期待の認知は日本と比しても高い値が報告されている（e.g., 伊藤・上淵・藤井・大家, 2013）。そして大学生になると、責任と自主性を強調する大学のシステムに適応するために大きなプレッ

シャーを受ける。ゆえに、現代の韓国人大学生は、挫折苦痛への耐性が比較的低く、小さな挫折にも精神的に脆弱であり、複雑な社会的状況への対処への困難感から自殺を考えたり、衝動的に自殺をしたりしようとする可能性があると考えられる（召, 2009）。

法律による対処 この問題に対し、法律面からの対処が試みられている。2011年3月30日には全6章から構成される“自殺予防法”が公布された。ここでは、国や地方公共団体は5年ごとに自殺実態調査を実施し、その結果を発表することが義務づけられている。また、自殺関連相談や自殺未遂者の事後管理、自殺予防に関する専門人材の養成などを行う、いわば自殺予防対策を現場の最前線で行う“自殺予防センター”に関する規定も含まれている。そして、国や地方公共団体には自殺有害情報（e.g., 集団自殺への参加者募集情報、自殺の具体的な方法、自殺を実行したり、自殺へと誘導したりする写真や動画など）の遮断といった予防体系の構築や運用が義務づけられた。このように、法律が制定されたことは、自殺対策事業に対する法的根拠が与えられたことを意味し、今後の自殺対策事業の発展性・継続性の面でプラスに作用することが見込まれる（レビューとして、藤原, 2011）。

ただし、藤原（2011）が述べるように、法律の制定をもって直ちに自殺率が下がるとは考えられていない。こういった法律をもとに、国や地方公共団体がどのような対策を実行していくかに関心が持たれている。

心理学的アプローチの必要性 自殺という問題に対

Correspondence concerning this article should be sent to: Tsutomu Fujii, College of Humanities, Sungshin Women's University, 34dagil 2, Bomun-ro, Seongbuk-gu, Seoul 136-742, South Korea (e-mail: tsut0muf@sungshin.ac.kr)

¹ 本研究は、2013年度誠信女子大学校学術研究助成費の支援を受けて行われた。（本 연구의 일부는 2013년도 성신여자대학교 학술연구조성비 지원에 의하여 이루어졌음）。また、本研究の一部は日本グループ・ダイナミックス学会第61回大会にて発表された。

² 本研究の実施にあたりご協力を賜りました実験参加者の皆様と、質問紙の韓国語版作成にご協力いただいた鄭 珪熙さん（東京大学大学院）に感謝申し上げます。また、貴重なコメントを賜りました編集委員の先生、審査者の先生方に厚くお礼申し上げます。

しては、法律による対処の他に、心理学的なアプローチからの対処も考えられる。自殺念慮に影響する要因を発見し、その要因へ働きかけることができれば、自殺の減少に寄与する可能性が見込める。この点に関連して、本研究では顕在的・潜在的自尊感情という概念に焦点を当てて論を進める。

自尊感情 (Self-Esteem; 以下 SE と略記する) を扱う研究は長きにわたり続けられ、これまでに多くの知見を生み出してきた。従来の研究において、この SE の測定に多く使用されてきたのは、Rosenberg (1965) の尺度に代表される自己報告式の質問紙尺度であろう。SE は、自殺念慮と関連が予想される孤独感や抑うつと負の相関が得られている (伊藤・小玉, 2005; 藤井, 2014)。また、実際に Creemers, Scholte, Engels, Prinstein, & Wiers (2012) は、SE と自殺念慮の間に負の相関を見出している。そして、SE が自殺念慮に影響することは、韓国でも示されている。たとえば Jang, Park, Oh, Lee, Kim, Yoon, Ko, Cho, & Chung (2014) は、年齢にかかわらず、抑うつを統制した場合でも、SE と怒りが自殺念慮に影響することを示した。したがって、SE を上昇させる介入を行うことは、韓国においても自殺念慮の抑制につながるものが期待される。

ただし、太幡 (2012) が述べるように、質問紙尺度に代表される自己報告に基づく尺度を用いた回答には、社会的望ましさが影響する可能性や、個人特性について、回答者が自覚していない点を把握できないことが問題として挙げられる。実際に、Rosenberg (1965) の尺度を山本・松井・山成 (1982) が翻訳した SE 尺度は、社会的望ましさ反応尺度の下位尺度である自己欺瞞と正の相関がみられることが繰り返し報告されている (藤井, 2010; 谷, 2008)。

潜在的測定法によるアプローチ こういった問題に対し、近年は潜在的測定法を用いたアプローチが試みられている。特に SE の測定に多く用いられている潜在的測定法は Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下 IAT とする) と Name Letter Task (Nuttin, 1985; 以下 NLT と略記する) である。IAT は、画面上に連続して現れる単語の分類課題を通して、特定の概念を間接的に測定する。一般的に IAT で潜在的 SE (Implicit Self-Esteem; 以下 ISE と略記する) を測定する際は、カテゴリー次元 (自己-他者) と属性次元 (快い-不快な) に関連する刺激語 (自分、友だち、嬉しい、醜いなど) について、対応するキー押しによって、単語のグループ分けを行う。課題の中で、カテゴリー次元と属性次元が組み合わせられた試行を 2 種類行い、反応時間が早い組み合わせ課題の方が、対になっているカテゴリーと属性の連合が強いと考えられる。

一方、本研究で取り上げる NLT は、回答者に対し

26 文字のアルファベットについて 1 文字ずつ好みを評定させ、自身のイニシャルに含まれる文字と、それ以外の文字の差を潜在的な自尊感情の指標とする測定法であり、IAT と同様に十分な信頼性および妥当性を有するとされる (Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000)。IAT は一般的にコンピュータを用いて実施することが多いが、NLT は質問紙と同様の形式で実施できるため、環境面の制約を受けにくいという特徴がある。しかし、NLT はアルファベットに対する評定値を指標とするため、英語を母国語としない者に対しても使用可能か否かという疑問が挙げられる (阿部, 2012)。この点に対し、Komori & Murata (2008) は、日本においてアルファベットを使用した場合でも、自身のイニシャルに対する選好が生起することを示した。また、藤井 (2014) も NLT を用いて、IAT を用いた先行研究 (原島・小口, 2007) と同様の結果が再現されることを確認している。日本以外でも、自身のイニシャルに含まれるアルファベットに対して選好が観察されることは、英語を母国語としないタイでも示されている (Hoorens, Nuttin, Erdelyi-Herman, & Pavakanun, 1990)。本研究では、自身のイニシャルに含まれる文字と、それ以外の文字への選好との差が理論的中央値 (0) を統計的に有意に超えること (i.e., 自身のイニシャルの方に有意に高い選好がみられること) をもって Name Letter Effect (以下 NLE と略記する) の生起と定義する。

ESE・ISE の不一致の影響 潜在的測定法で測定される ISE は、どういった役割を果たすのだろうか。これまでに国内外を問わず多くの研究が報告されているが、特に心理的健康との関連を扱った研究が多い。近年の研究では、自己報告で測定される顕在的 SE (Explicit Self-Esteem; 以下 ESE と略記する) が高い者の中でも、自己が脅威に曝された際に他者に対して攻撃的になる者がいるといった報告があり (レビューとして、Baumeister, Smart, & Boden, 1996)、高い ESE は必ずしも望ましい結果をもたらさないことが示唆される。このような結果の説明として、Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll (2003) の研究を挙げることができる。Jordan et al. (2003) は、ESE が高い者の中にも、ISE も高い者と ISE は低い者の 2 タイプがあり、この ISE の高さが適応・不適応を分ける可能性を示唆している。たとえば、ESE は高いが ISE は低い群は、ESE・ISE とともに高い群と比して自己愛が高く、内集団ひいきを強く行うことが報告されている。このように、ESE が高く ISE が低い “防衛的／傷つきやすい高 SE (Defensive/Fragile high self-esteem)” と呼ばれる SE を持つ者は、ESE・ISE とともに高い安定的高 SE (Secure high self-esteem)” と呼ばれる SE を持つ者と比して適応の度合いが低いとされる。

この主張を支持する結果は、たとえば藤井 (2014) において報告されている。藤井 (2014) は、NLTを用いて参加者のISEを測定し、自己報告によるESEと組み合わせ、抑うつや内集団ひいきとの関連を検討している。その結果、防衛的高SEを持つ群は、安定的高SEを持つ群と比して抑うつが高く、内集団ひいきを強く行うことが示された。また、Creemers et al. (2012) は、ISEが高く、ESEが低い者は自殺念慮が高く、両者の不一致が大きいほど、抑うつ傾向や自殺念慮、孤独感が高いという結果を報告している。このように、ESEとISEの不一致が、心理的な不健康さや防衛的な行動と関連するという研究が蓄積されつつある。

韓国におけるNLTの応用可能性 Creemers et al. (2012) が示すように、ESE・ISEの不一致が自殺念慮などの不適応的な変数と関連することを考慮すれば、韓国でもISEを含めた心理学的アプローチの検討が必要であると考えられる。したがって、ISE測定時の環境面の制約を考慮したときに、ISEの指標としてNLTが使用可能であるかを検討することには一定の意義があらう。韓国人のイニシャルは3文字に亘ることが多く (i.e., Kim Hae Youngという人の場合、イニシャルはK, H, Yの3文字である)、この点は日本とは異なっている。本研究では、日本と同様に英語を母語としない韓国においても、このNLEが生起するか否かを検討することで、韓国におけるISEの指標としてNLTが使用可能であるかを確認することをめざす³。

なお、方法の箇所でも述べるが、本研究の参加者はすべて女性である。韓国では男性と比して女性の方が自殺率は低いが、女性の自殺率もOECD加盟国の34カ国の平均値より高い。OECD (2014) のデータベース

の資料をもとに韓国およびOECD加盟国の自殺者数を参照したところ、各国のデータがおおむね揃っている2010年においては、OECD加盟国全体の平均自殺者数は10万人あたり12.39人 (男性は20.07人、女性は5.63人) であった一方で、韓国男性は49.6人、韓国女性も21.4人の自殺者数が報告されている。すなわち、相対的に自殺が少ないとされる韓国女性も、OECDの平均値と比してかなり高い自殺率を示していることから、女性のみを対象としても、本研究は一定の資料的価値を有すると考えられる。

方 法

参加者 4年制の大学に通う韓国の女子大学生211名 (平均年齢 20.62 ± 1.93 歳) が実験に参加した。

材料 本研究では、以下の尺度を用いた。

(a) **自尊感情尺度 (以下、SE尺度と略記する)** 参加者のESEを測定するため、전 (1974) の尺度を用いた。この尺度はRosenberg (1965) の10項目からなる尺度を韓国語に翻訳したものである。“1: まったく当てあまらない—5: 非常によく当てはまる”の5件法で回答を求めた。

(b) **NLT** 参加者のISEを測定するため、Nuttin (1985) が考案したNLTを用いた。本研究では、アルファベット26項目をランダムに配置したものを使用し、“1: 非常に嫌い—7: 非常に好き”の7件法で回答を求めた。

本実験では同時に他の尺度も実施しているが、本稿の目的とは異なるため報告しない。調査票の設問は、日本語が堪能な韓国人留学生に翻訳を依頼し、最後に著者が内容を確認した。

手続き 授業時間の一部を利用し、集団で一斉に実施した。実施前に、本調査に対する回答は任意であり、受講している授業の成績等とは一切の関連がないこと、回答しないことによる不利益はないことを説明した上で実施した。実施順序はNLT、SE尺度の順であり、最後に参加者の年齢およびイニシャルの記入を求めた。他の尺度も含めて、回答に要した時間は15分程度であった。後日、希望者に対して別途機会を設け、実験内容の説明を行った。

結 果

分析対象者の確定 NLTの回答においてすべての項目に4点を付した者、イニシャルが未記入であった者および外国人留学生を除き、最終的な分析対象者は188名 (平均年齢 20.62 ± 1.93 歳) とした。

各尺度の得点化 SE尺度は逆転項目を処理した上で合算平均得点を求めた。また、NLTのイニシャルに含まれる語の評定値について相関係数を算出したところ、韓国では3文字の組み合わせにおいて、いずれも $r = .37$ ($p < .001$) の値が得られた⁴。したがって、イ

³ 韓国内においてすでに同様の試みがなされているか否かを確認するため、データベースPsycINFOを用いて“name letter effect”や“initial preference effect”、“name letter task”といったキーワードと併せて“Korea”をキーワードとした検索を行ったが、該当する文献は見当たらなかった。さらに、Google Scholarを用いて、潜在的自尊感情を意味する“암묵적 자존감”を入力して検索すると、263件の該当があった (これは、該当する論文において潜在的自尊感情を扱っていない場合でも、文章の中に“潜在的”という言葉と、“自尊感情”の両者が含まれた場合はヒットするため、“암묵적 자존감”をダブルクォーテーションで括り再度検索すると、ヒットしたのは6件のみであった)。しかし、併せて“name letter effect”や“initial preference effect”、“name letter task”を含めて検索した場合、NLTを用いている文献の該当はなかった。“implicit association test”を含めて検索した場合は3件がヒットしたが、これらの研究は、自身の体型に関する情報をフィードバックされた際にESE・ISEが影響を受けるか否かという研究や、認知行動療法の効果測定の一指標としてISEを含めた研究、そして潜在的な親子関係の認知の測定にIATを使用している研究であり、いずれもESEとISEの不一致を扱っているものではなかった。こういった背景から、韓国においてはNLEの生起の有無の検討も含め、NLTを用いた研究は非常に少ないことが予想される。

ニシャルに対する評定値を合算して用いることとし、self-corrected algorithm (LeBel & Gawronski, 2009) を用いて、参加者のイニシャルに含まれるアルファベットの評定値と、イニシャルに含まれないアルファベットの評定値の差をとり得点化した。いずれの尺度も、得点が高いほどSEが高いことを示す。また、自身のイニシャルに含まれる文字と含まれない文字の平均値およびSDを算出した。イニシャルに含まれる文字は $M=5.11$ ($SD=0.92$)、イニシャルに含まれない文字は $M=4.39$ ($SD=0.38$) であった。

Komori & Murata (2008) では、姓に含まれるイニシャルと名に含まれるイニシャルへの選好パターンが男性と女性で逆転していた。男性は名より姓への選好が有意であった一方、女性は姓より名への選好が有意に高かった。本研究でも同様の検討を行ったところ、姓への選好は $M=5.08$ ($SD=1.22$)、名への選好は $M=5.11$ ($SD=0.96$) という値が得られ、両者に有意な差はみられなかった ($t(187)=0.38, ns$)。

加えて、SE尺度の信頼性の推定値としてCronbachの α 係数を求めたところ、 $\alpha=.85$ という値が得られたため、SE尺度は一定の内的一貫性を有すると判断した。以下、SE尺度の得点をESE得点、NLTの得点をISE得点と定義する。

ESE・ISE得点の様相 ESE・ISE得点の平均値について、理論的中央値（それぞれ3, 0）からの差について t 検定を行った。その結果、ESE得点の平均値は理論的中央値よりも有意に高かった ($t(187)=12.51, p<.01, d=1.83$)。また、ISE得点の平均値も理論的中央値よりも有意に高かった ($t(187)=11.93, p<.01, d=1.74$)。

ESE・ISE得点の相関 続いて、ESE・ISE得点の相関係数を算出したところ、 $r=.15$ ($p=.04$) という値が得られ、弱い正の相関が有意であった。

考 察

本研究は、韓国において深刻な問題となっている自殺に対し、ESE・ISEに焦点を当てたアプローチの可能性を検討すべく、ISEの測定法のひとつであるNLTを用いて、NLEが生起するか否かを検討した。以下、本研究で得られた結果について順に考察する。

NLEの生起の有無 まず、NLTの平均値は理論的中央値である0よりも有意に高かった。すなわち、英語を母語としない韓国においても、日本と同様にNLEが生起することが示されたといえる。この点は、韓国においてもNLTがISEの指標として使用可能であることを示唆するものである。ただし、姓および名

への選好の程度はKomori & Murata (2008) の研究とは異なり、本研究で対象とした韓国女性データの、姓・名のいずれに対しても、同程度の選好が観察された。女性のデータのみであるため過度な解釈はできないが、韓国においては、姓・名のいずれかに偏る選好はみられなかった点は日本と異なっている。

ESE・ISE得点の相関 ESE・ISEの相関については、弱い正の相関が有意であった。Komori & Murata (2008) では、ESEとISEの相関は有意ではなく、この点も日本と異なっている。日本では謙遜のためにESEの得点が抑制される傾向があるが（村上・山口・尾崎, 2004）、韓国においてはその抑制の程度が低いのかかもしれない。ただし、本研究におけるESE・ISEの相関係数は決して高い値ではない。Komori & Murata (2008) ではESEとISEの相関は有意でないものの、 $r<.20$ という値が報告されている。すなわち、 $r=.19$ 程度の相関係数であったと推測されるが、データ数が65であったため、この値は有意には至っていない。しかし、本研究では188名のデータがあり、Komori & Murata (2008) より低い相関係数 ($r=.15$) でも有意になっている。このような点から、統計的に有意であるか否かに過度に注目すべきではなく、解釈は慎重に行う必要があるだろう。

まとめと今後の展望 本研究の結果から、韓国においても日本と同様にNLEが生起する一方で、ESE・ISEの相関の傾向や姓・名への選好の程度は異なる可能性が示された。NLTはIATと比して実施が容易であるため、韓国における今後のSE研究にも応用可能であると考えられる。冒頭で述べたように、韓国における自殺率の高さは深刻である。ESEとISEの不一致が自殺念慮に結びつくというCreemers et al. (2012) の研究を踏まえれば、両者の不一致を解消するような心理学的アプローチが有効である可能性がある。近年は評価条件づけを用いた態度変容の試みも行われており（尾崎, 2006, 2010）こういった方法を応用することで、ESEとISEの不一致を解消できるかもしれない。その意味で、本研究はあくまで基礎的なものであるが、韓国における今後のISE研究を進展させ、ISEに対する介入研究や、ESEとISEの不一致を対象とした研究へとつながる可能性がある。本研究は、自殺という韓国における大きな社会問題に対し、心理学からの一アプローチを提案したという点で価値があると考えられる。

ただし、本研究で対象とした参加者は女性のみに限られている点が指摘できる。차・서 (2012) は、18歳から28歳の韓国看護学生297名を対象にした研究で、ESEには性差がみられないという結果を報告している、また、유・양・이・이・이・이・박 (2003) は、医科大学の3, 4年生202名を対象に研究を行い、こちらもESEに有意な男女差がないことを報告している。

⁴ 韓国人においても、イニシャルが3文字ではなく、2文字の者も存在する。本研究で分析対象者とした参加者の中には、5名が該当していた。この5名を除いて分析を行った場合でも、結果に影響はみられなかった。

すなわち、少なくともESEに関しては韓国における性差はないように思われるが、本研究ではISEにおける性差の有無について検討できていない。今後は男性のデータも収集した上で、本研究の結果が頑健であるのかを確認するとともに、NLTを用いた韓国におけるISEを扱う研究を行い、知見を重ねていく必要があると考えられる。

加えて、NLTはIATの代替指標として使用可能とは言いがたい点が指摘される。たとえばBosson et al. (2000) はNLTとIATの相関係数は -0.06 であったことを示しており、両者はISEの同じ側面を測定しているとは言いがたい（同様の議論は藤井, 2014）。藤井 (2014) は、IATではなくNLTを用いた場合でも、IATを用いた先行研究（原島・小口, 2007）と同様の結果が再現されることを示しているが、この点は留意しておく必要があるだろう。IATは反応時間をベースにした指標であるが、NLTは反応時間ではなく、個々のアルファベットに対する意識的な評価を指標にしているため、どちらもISEの間接的な測定法ではあるものの、その性質は異なると思われる。測定対象への気づきという点で考えると、反応時間を測定するIATよりも、個々のアルファベットへの意識的な評価を求めるNLTの方が、回答者による気づきが生じやすいかもしれない。それゆえに、気づきによって回答が歪み、NLTとIATの両者を並行して実施したBosson et al. (2000) でも有意な相関が得られなかった可能性が考えられる。

しかし、両者の単相関が低いことは、測定誤差による相関係数の希薄化などの影響も考えられるため、両者が異なるものであると結論づけるのも尚早であると思われる。本研究ではNLTとIATを同時に実施しているわけではないことから、韓国においてNLTとIATの測定しているISEの側面が異なるのか、近似しているのかという点も含めた今後の検討が必要であろう。

本研究の結果から、韓国においてもNLEが生じうる可能性が示された。今後はNLTとIATの測定対象の精査を行うとともに、実際にESEとISEの不一致が自殺念慮に結びつくのか否か、またISEを向上させる介入の可能性および実用性を検討することで、韓国における深刻な社会問題である自殺に対する心理学的アプローチの応用可能性を吟味していくことが望まれる。

引用文献

- 阿部宏徳 (2012). ひらがな一覧版ネームレターテストの作成 東京成徳大学研究紀要, **19**, 29-37.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, **103**, 5-33.
- Bosson, J. K., Swann, W. B. Jr., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 631-643.
- 차 남현 · 서 은주 (2012). 간호대학생의 분노표현과 자아존중감. 지역사회간호학회지, **23**, 451-459. (Cha, N. H., & Seo, E. J. (2012). The relationship between anger expression and self-esteem in nursing college students. *Journal of Korean Academy of Community Health Nursing*, **23**, 451-459.)
- Creemers, D. H. M., Scholte, R. H. J., Engels, R. C. M. E., Prinsein, M. J., & Wiers, R. W. (2012). Implicit and explicit self-esteem as concurrent predictors of suicidal ideation, depressive symptoms, and loneliness. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **43**, 638-646.
- 藤井 勉 (2010). 「暗黙の」知能観と社会的望ましさの関連——他の特性との関連も交えて—— 学習院大学人文科学論集, **19**, 151-162.
- 藤井 勉 (2014). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 心理学研究, **85**, 93-99.
- 藤原夏人 (2011). 韓国の自殺予防法 外国の立法：立法情報・翻訳・解説, **250**, 193-200.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: the implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- 原島雅之・小口孝司 (2007). 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果 実験社会心理学研究, **47**, 69-77.
- Horens, V., Nuttin, J. M., Erdelyi-Herman, L., & Pavakanun, U. (1990). Mastery pleasure versus mere ownership: A quasi-experimental cross-cultural and cross-alphabetical test for the name letter effect. *European Journal of Social Psychology*, **20**, 181-205.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討 教育心理学研究, **53**, 74-85.
- 伊藤忠弘・上淵 寿・藤井 勉・大家まゆみ (2013). 達成動機づけにおける重要な他者の果たす役割——日本と韓国の比較研究—— 調査研究報告（学習院大学東洋文化研究所）, **58**.
- Jang, J. M., Park, J. I., Oh, K. Y., Lee, K. H., Kim, M. S., Yoon, M. S., Ko, S. H., Cho, H. C., & Chung, Y. C. (2014). Predictors of suicidal ideation in a community sample: Roles of anger, self-esteem, and depression. *Psychiatry Research*, **216**, 74-81.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshinobrowne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 969-978.
- 전 병재 (1974). Self-esteem: A test of its measure-

- bility. *연세논총*, **11**, 109-129.
 (Jon, B. J. (1974). Self-esteem: A test of its measurability. *Yonsei Nonchong*, **11**, 107-130.)
- 김 정진 (2009). 대학생의 자살생각 관련요인 연구; 자살시도 경험, 정신건강, 심리사회적 문제를 중심으로. *정신보건과사회사업*, **32**, 413-437.
 (Kim, J. J. (2009). An analysis of variables related to university student's suicidal ideation: Regarding effect of suicidal attempt experience, mental health, psychosocial problems. *Mental Health & Social Work*, **32**, 413-437.)
- Komori, M., & Murata, K. (2008). Implicit egotism in Japan: Preference for first and family name initials *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, **40**, 101-109.
- LeBel, E. P., & Gawronski, B. (2009). How to find what's in a name: Scrutinizing the optimality of five scoring algorithms for the name-letter task. *European Journal of Personality*, **23**, 85-106.
- 村上史朗・山口 勸・尾崎由佳 (2004). 自尊心と謙遜傾向の関連——顕在指標と潜在指標を用いた検討—— *日本社会心理学学会第45回大会発表論文集*, 360-361.
- Nuttin, J. M., Jr. (1985). Narcissism beyond Gestalt and awareness: The name letter effect. *European Journal of Social Psychology*, **15**, 353-361.
- Organisation for Economic Co-operation and Development (2014). Causes of mortality, Suicides, deaths per 100 000 population (http://stats.oecd.org/Index.aspx?DataSetCode=HEALTH_STAT).最終閲覧:2014年10月19日.
- 尾崎由佳 (2006). 接近・回避行動の反復による潜在的態度の変容 実験社会心理学研究, **45**, 98-110.
- 尾崎由佳 (2010). 古典的条件づけによる潜在的態度の形成と変容に関する研究展望 行動科学, **49**, 53-61.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Statistics Korea (2012). Causes of Death Statistics in 2012 (<http://kostat.go.kr/portal/english/news/1/1/index.board?bmode=read&bSeq=&aSeq=308938&pageNo=1&rowNum=10&navCount=10&currPg=&sTarget=title&sTxt=Causes>)最終閲覧: 2014年10月19日.
- 太幡直也 (2012). パーソナリティと社会的認知 鈴木公啓 (編) パーソナリティ心理学概論——性格理解への扉—— ナカニシヤ出版, pp. 121-129.
- 谷 伊織 (2008). バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 *パーソナリティ研究*, **17**, 18-28.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 *教育心理学研究*, **30**, 64-68.
- 유 정선・양 원선・이 경은・이 상은・이 승규・이 후연・박 은철 (2003). 의과대학생에 있어서 성별에 따른 자아존중감의 차이 *한국의학교육*, **15**, 241-248.
 (Yoo, J. S., Yang, W. S., Lee, K. E., Lee, S. E., Lee, S. G., Lee, H. Y., & Park, E. C. (2003). Gender difference in self-esteem of medical students. *Korean Journal of Medical Education*, **15**, 241-248.)

(2014年6月18日受稿, 2014年11月21日受理)